

## メッセージアウトライン 創世記37:1～36「ヨセフ」

メソポタミアのパダン・アラムから帰って来たヤコブの一族は旅を続けて、父イサクが住んでいたヘブロンへ行った。そこで父イサクは百八十歳で死んだ。(35:28) 彼は神の祝福のうちに長寿を全うした。そしてヤコブと兄エサウがイサクを葬った。(35:29) ヤコブとエサウはすでに和解していたのでこのように共に父を葬ることができたのである。36章はエサウとその子孫の歴史であるがここは省略し、焦点をヤコブの家系に当てていく。

[1]「さて、ヤコブは父の寄留の地、カナンの地に住んでいた」

「父イサクの寄留の地」とはヘブロンのもので、ここはエルサレムの南約30キロメートルの地。

兄のエサウはすでに死海の南東のセイルの地へ移住していた。(36:6-8)

[2]「これはヤコブの歴史である。ヨセフは十七歳のとき、兄たちとともに羊の群れを飼っていた。彼はまだ手伝いで、父の妻ビルハの子らやジルパの子らとともにいた。ヨセフは彼らの悪いうわさを彼らの父に告げた」

「これはヤコブの歴史である」民族として形成されるイスラエルへの新しい歴史がここから始まっていく。「ヨセフ」ヤコブの最愛の妻ラケルから生まれた子。年寄り子であったので特に可愛がっていた。彼の上には十人の腹違いの兄たちがいる。彼の弟はベニヤミンで母ラケルは彼を産む時に死んでいる。

ヨセフはこの時十七歳。彼の兄たちと羊の群れを飼っていた。彼はまだ手伝いであり、父の妻ビルハやジルパの子らと一緒にいた。ビルハは妻ラケルの女奴隷、ジルパは妻レアの女奴隷であった。その子どもたちはそれぞれダンとナフタリ、ガドとアシェルである。

「ヨセフは彼らの悪いうわさを彼らの父に告げた」ともにいた兄たちは自分たちが女奴隷の子で、父が愛するヨセフと比べて不満があり、ヨセフをねたみ、そのための仕事がおざりであったか、あるいは別の悪いことをしていたのかもしれない。それでヨセフは彼らのことを父に告げ口をした。ここには自分の立場の優越感と霊的な高慢さが見える。

[3-4]「イスラエルは、息子たちのだれよりもヨセフを愛していた。ヨセフが年寄り子であったからである。それで彼はヨセフに、あや織りの長服を作ってやっていた。ヨセフの兄たちは、父が兄弟たちのだれよりも彼を愛しているのを見て、彼を憎み、穏やかに話すことができなかった」

偏愛はこのような問題を産みだす。「あや織りの長服」飾りのついた高価で特別な服であったらしい。

[5-8] ヨセフの見た夢 I

兄弟たちが畑で束を作っていると、突然ヨセフの束が起き上がり、まっすぐに立った。そして兄たちの束がその周りに来て、伏し拝んだ。これを聞いた兄たちは、ヨセフが王にでもなって自分たちを支配するということのかと言って彼をますます憎むようになった。彼は兄たちをさげすむつもりはないのかもしれないが、無意識に高慢になっていたであろう。

#### [9-11] ヨセフの見た夢Ⅱ

またヨセフは夢を見て、それを得意になって兄たちに語る。それは太陽と月と十一の星が彼を伏し拝んでいる夢であった。(9) 「太陽と月」とは父と母、「十一の星」とは彼の兄弟たちのことである。それでこのことを聞いた父イスラエルはヨセフを叱った。父がヨセフを叱ったのはこの時が初めてではないだろうか。兄たちはヨセフのことばに傷つきながら、いよいよねたみと憎しみの感情を募らせていった。(10) それでも父はこのことを心にとどめていた。(11)

これらの夢は後に起こることの神からの啓示であったが、それはこの時点では彼には分らない。ヨセフはこんなことを得意げに語らなければよいのと思うが、そこが、彼の甘やかされているがゆえの未熟さであり、弱さであった。彼は人の心の痛みがわからないのである。

[12] 「その後、兄たちは、<sup>のち</sup>シエケムで父の羊の群れを世話するために出かけて行った」

シエケムはしばらく前にヤコブの息子たちが妹ディナがはずかしめを受けたことで、その町の男全員を虐殺し、町を略奪した地である。なんでそんなところにまた行くのか。よほど牧草が豊かにあったのか。しかし、そこには、かつてヤコブが一族全員から偶像やそれに関する貴金属を埋めた場所があった。(35:4) 悪く考えると息子たちは偶像はさておき、他の価値あるものを取り戻すために行ったのではないかとも考えられる。もしそうなら、彼らは俗悪でこの世的なものに価値観を置いている者たちだということになる。真実はどうか。しかし、やがて次の場面で彼らの悪があらわになってくる。

[13-14] この時ヨセフは父のもとにいたようである。彼は父に可愛がられていたので、父の手もとに置かれていたのであろう。そして父イスラエルはこの時、シエケムで羊の群れを飼っている兄たちの安否を尋ねさせるためにヨセフを送ることにした。それで彼はシエケムに行った。このシエケムはヘブロンからは約80キロメートル北の地である。歩くには二日ほどかかったであろう。

[15-17] 「彼が野をさまよっていると」(15) シエケムに来たのにそこにいるはずの兄たちに会うことができず、どこへ行ってよいかわからなかったのであろう。一人の人が彼に出会い、彼に兄たちの居場所を尋ねるとドタンの方へ行ったということが分かった。そこはシエケムから約20キロメートル北の地である。そして、ヨセフはついにドタンで兄たちを見つけた。(17)

[18-19] 「兄たちは遠くにヨセフを見て、彼が近くに来る前に、彼を殺そうとたくらんだ」(18)

ヨセフは父の愛のしるしとしてのあや織りの長服を着ていたのだから遠くからでも見分けがついたのであろう。そしてなんと彼を殺そうとたくらんだのである。

「見ろ。あの夢見る者がやって来た」(19) 彼らはヨセフが見た夢を覚えていた。

[20]「さあ、今こそあいつを殺し、どこかの穴の一つにでも投げ込んでしまおう。そうして、凶暴な獣<sup>けもの</sup>が食い殺したと言おう。あいつの夢がどうなるかを見ようではないか」

彼らはヨセフがまた自分たちを見下すためにやって来たと思ったのか。彼らはヨセフを殺そうとし、父への言い訳のことばまで用意する。ここに彼らの悪がはっきりと表れている。彼らはヨセフをねたみ、その高慢な振る舞いに対しては死をもって報いても当然だと思ったのであろう。これは人間の持つ恐ろしい罪の性質である。アダムとエバの子どものカインが弟のアベルを殺した時以来、何も変わっていない。→創世記4章

[21-22] ルベン<sup>ルベ</sup>は長男であったので、やはり分別があったのであろう。ヨセフを何とか救おうとして、彼を殺すのではなく、荒野の穴に投げ込むようにと提案する。これは後で救い出して父のもとへ返すためであった。

[23-24]「ヨセフが兄たちの所に来たとき、彼らは、ヨセフの長服、彼が着ていたあや織りの長服をはぎ取り、彼を捕えて、穴の中に投げ込んだ。その穴は空で、中には水がなかった」

ヨセフが着ていたあや織りの長服こそ彼らの憎しみの的であり、それをはぎ取ることは特権のはく奪のように思ったのであろう。この「穴」は雨水をためておくための穴で、乾季には水がなかった。

[25]「それから、彼らは座って食事をした」ここに彼らの残酷さ、非情さを見る。ヨセフが投げ込まれた穴の中で傷つき、苦しみながら助けと憐れみを請うているのに、兄たちは知らん顔をして飲み食いをしている。まるで仕留めた獲物を前にして喜びながら飲み食いしている獵師のようである。

「そこに、イシュマエル人の隊商がギルアデからやって来ていた。彼らは、らくだに<sup>じゅこう</sup>樹膠と乳香と没薬を背負わせて、エジプトへ下って行くところであった」イシュマエルはアブラハムと女奴隷ハガルとの間に生まれた子で、その子孫がイシュマエル人ということになるが、ここではもっと広い意味で遊牧の商人たちのことを指すと思われる。「ギルアデ」ヨルダン川の東側に広がる地。「樹膠」ある種の木から採ったゴム状の樹脂。「乳香」アラビアなどに産する数種の乳香樹から採った樹脂を乾燥させた高価な香料。「没薬」アラビアやパレスチナ特産の木から採った樹液から作られたもので香料や防腐剤、痛みを和らげる薬として用いられた。彼らはギルアデからヨルダン川を西へ渡り、ドタンを経由して地中海沿いの道に出て、エジプトへ南下して行くというコースを取っていたものと思われる。

[26-27] ここでユダがヨセフを殺すよりもイシュマエル人の隊商に売ろうと提案する。彼もヨセフが助けを乞うのを聞いて、殺すことは避けたいと思ってこのような提案をしたのであろう。もっとも奴隷として売ることも残酷であるが。

[28]「ミディアン人の商人たち」ミディアン人は創世記25:1~6を見ると、これもアブラハムの後妻ケトラから生まれた人物であることがわかる。アブラハムは後に彼らを東方の国に行かせて自分の子イサクから遠ざけている。それでミディアン人を含む遊牧の商人たちの総称がイシュマエル人として当時知られていたのだと考えられる。それでヨセフの兄たちは彼を銀二十枚でイシュマエル人に売った。モーセの時代、レビ記27:5には五歳から二十歳までの男の評価は銀二十シケル（すなわち銀二十枚）と言われている。

（1シケルは11.4グラム）それでヨセフは通り相場の値段で買われたのであろう。そして彼はエジプトへ連れられて行った。

[29-30] 長男のルベンはこの時いなかった。家畜の放牧か、あるいはヨセフを助ける方法を考えるため、そこにいなかったのであろう。彼はヨセフがもうそこにおらず、奴隷として売られたことを知って非常に嘆き、取り乱した。これは長男のゆえの父への責任と、自らの弟たちをまとめる統率力の不足、そして自分に対して父に何と言われるかなどの大きな不安があったゆえのことであろう。

[31]「彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎを屠<sup>ほふ</sup>って、長服をその血に浸した」

これは彼らが父を欺くためであり、また彼ら自身がヨセフの死の責任逃れをするためであった。かつて父を欺き、兄を欺いたヤコブがここでは息子たちに欺かれている。すでにヤコブは叔父ラバンのもと、パダン・アラムでその報いを受け、刈り取りをしているが、ここではまたも苦しみを受けている。ヤコブの人生の後半はなかなか厳しい。彼は確かに神の祝福の契約を受け継ぎ繁栄していたが、個人的には子どもたちによる試練を受けなければならなかった。すべては神の摂理のもとに起こってくるが、彼の若い時の欺きの罪、また一夫多妻のもたらした問題が様々な形で実を結んできていることがわかる。

私たちが誰も知らない、だれも見えていないと思って様々な罪や悪を行っていることやがて長く苦しい刈り取りをしなければならなくなるかもしれない。私たちは悪や罪の道に進むのではなく、神を恐れ、神を愛し、そのみことばに心から従い続けなければならない。そして常に私たちの救い主イエス・キリストの十字架のもとに立ち返るのである。そこを私たちの原点としなければならない。

[32-34] ヤコブは息子たちが持ってきた血染めの長服を見て、それをヨセフの長服と認め、ヨセフが悪い獣にかみ裂かれ、殺されたのだと考えた。(32~33) 彼は自分の衣を引き裂き、荒布を腰にまとい、何日もその子のために嘆き悲しんだ。(34) 「荒布」やぎの毛で織った黒色の荒い布。死者への哀悼のためや悔い改めのために着用した。

[35] ヤコブの嘆き悲しみは非常に大きく、彼の息子、娘たちがみな来て慰めたが、彼は慰められることを拒み、「私は嘆き悲しみながら、わが子のところに、よみに下って行きたい」と泣いた。これは自分も死んでヨセフのところにいきたいとまで彼は思っているのである。「娘たち」とは娘はディナひとりしかいないはずなので、これは息子たちの嫁たちのことを言っているのであろう。息子たちは自分たちのした悪事のために父の

嘆きがあまりにも大きいので後悔の念もあって、演技ではなく本当に慰めようとしたのであろう。しかしすべては後の祭りである。

[36]「あのミディアン人たちは、エジプトでファラオの廷臣、侍従長ポティファルにヨセフを売った」

ヨセフはエジプトの奴隷市場で売りに出され、エジプトの王ファラオに仕える廷臣で侍従長ポティファルに売られた。彼はこれからどうなるのか。しかし、ここからヨセフの神に導かれた新しい人生が始まる。そして神の大いなる救いの計画が進展していくのである。

父ヤコブの偏愛、ヨセフの高慢、兄たちのねたみと憎しみ、そしてついにそれらが絡み合って殺意となり、ヨセフは兄たちに捕らえられ、殺される寸前まで行ったが、最後にはエジプトに奴隷として売られることとなった。息子たちに欺かれたヤコブはヨセフが死んだと思い、非常な嘆き悲しみに陥る。

このような欠けだらけ、罪だらけの人間たちのもたらす悲しむべき出来事を通して、なおも神の救いのご計画は進められていく。私たちが欠けだらけであり、肉の弱さの中に生き、人を傷つけ、自分を傷つけ、神を悲しませる者であるが、それゆえになおいっそう神の恵みを願い求め、神のみこころにかなう者と変えられ、きよめられていく必要がある。

私たちはキリストにあって新しい者とされた自覚を常に持たなければならない。→Ⅱコリント5:17、  
エペソ4:20~32